

国際交流・異文化理解のための作品ガイド（書籍・映画）

このリストについて

新型コロナウイルスの拡大を受け、留学や国際交流の機会が急激に減ってきました。出会いと学びの場が失われているこの状況を、私たちは大変危惧しています。

今後は、勉強の仕方や社会生活のあり方について、価値観を大きく変えるように迫られることでしょう。世界や文化のかたちが変わることで、新たな偏見や差別思想が生まれてくるかもしれません。

こうした時期こそ、異文化学習の歩みを止めてはいけません。誰かに共感したり、価値観の変化を受け入れたりするには、まずは知識が必要です。また、今とまったく違う境遇を想像する力は、精神的な癒やしを与えてくれもします。異文化に思いを馳せることは、危機的な状況にあっても大事なことです。

本リストでは、大妻女子大学の学生に向けて、国際交流・異文化理解のモチベーションを高めるための書籍・映画を選びました。学習の参考にしてもらえればと思います。

自宅に引きこもりつつも、視野は世界に広げていってください。

国際センター 森功次

このガイドの最終更新：2020年4月9日

授業開始が延期となり、学生たちが自宅待機を余儀なくされている今の状況に鑑み、この作品リストは完成を待たずに発表し始めることにしました。今後、推薦作品を少しずつ増やし、リストを充実させていく予定です。

この作品ガイドの趣旨に賛同し、推薦作品を挙げてくださる方を募集しています。ご協力頂ける方は、下記のアドレスまでご連絡ください。

森功次 morinorihide[at]otsuma.ac.jp

【難易度の見方】

- ★ とても読みやすく、誰にでもおすすめ
- ★★ ちょっと背景知識がいる一般書
- ★★★ 特定分野の入門として
- ★★★★ 考察をさらに深めるために
- ★★★★★ 専門家向けの学術書

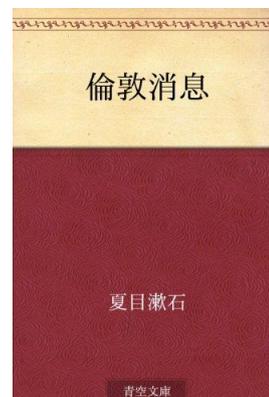
【書籍】

夏目漱石『倫敦消息』

今から120年前の、夏目漱石「初海外体験記」です。33歳の頃、文部省の留学生としてイギリス留学を命ぜられた夏目漱石が病床に伏す親友の正岡子規を楽しませるためにロンドンから送った日記形式の手紙をまとめたものです。『ころ』や『我輩は猫である』、『坊ちゃん』など、みなさんもお馴染みの作品を生み出した日本を代表する文豪である夏目漱石が、ロンドン生活の辛さを訴え日本に早く帰国したいと弱音を吐いたり、ある女性のことを「アンパンのように丸い」と表現したり、ユーモアたっぷり、夏目漱石の人間味あふれる作品です。これを読んでから『倫敦塔』を手にとると、また違った角度で鑑賞できるでしょう。Kindleでは無料で読めます。

収載『現代表記版 ザ・漱石—全小説全一冊』第三書館 など【難易度★】

国際センター 伊藤みちる



沢木耕太郎『深夜特急（1～6）』 新潮文庫、1986-1992年

わたしが高校生の時、高校の英語の先生が勧めて下さった本です。著者は突然、インドのデリーからイギリスのロンドンまで乗合バスだけで旅することを思いつくものの、初っ端から予定になかった香港・マカオでストップオーバー。その後、タイ・マレーシア・シンガポール・インド・アフガニスタン・イラン・トルコ・ギリシャ・イタリア・スペイン・ポルトガル・フランス・イギリスと旅を続けて行きます。様々な土地の、市井の人々との交流、食べ物や飲み物、匂いや音、伝わらない言葉やジェスチャーが文脈から感じられ、あたかも自分自身がその場にいるような感覚が味わえます。移動が制限されている今だからこそ、若者の一人旅の実話を読んで世界に対するワクワク感を培ってみてはいかがでしょうか。【難易度★】

国際センター 伊藤みちる



マイケル・ブース『英国一家、日本を食べる』 寺西のぶ子
訳亜紀書房、2013年

アニメ化・コミック化もされた、イギリスから家族と共に日本にやってきたジャーナリストが100日間にわたって日本を食べ歩きした記録です。みなさんが普段、何気なく食べている「日本のごはん」を、日本食文化として理解しようとする姿が微笑ましいです。日本の当たり前を、客観的な視点から、なかなか毒舌ぶりで体当たりにレポートしており、外国人から日本や日本食文化がどのように見られているのかを知ることができます。イギリス人特有のユーモア溢れる言い回しも楽しいです。持ち運びに便利な文庫版も角川文庫から出版されています。もう少しチャレンジしてみたい方は、比較的簡単な英語で書かれている原書 *Sushi and Beyond: What the Japanese Know About Cooking* を読んでみてはいかがでしょうか。【難易度★】

国際センター 伊藤みちる



ジャン＝ポール・サルトル『ユダヤ人』 岩波新書、1956年

原著は1947年。哲学者でもあり作家でもあったサルトルは、第二次大戦直後のこの時期にユダヤ人差別の問題を考察し、ユダヤ人差別はわれわれ差別をする側の問題なのだ、と主張しました。この本の中でサルトルは、差別者がもって来がちな様々な理由づけ、言い訳を次々に喝破していきます。大戦後のフランス、という時代状況を意識しながら読む必要がある本ではありますが、話の内容は現代に応用できる部分が数多く、人種問題や民族問題だけでなく、現代のあらゆるところにある差別・偏見を考えるヒントを与えてくれるでしょう。この種の本は、たんなる遠い過去のドキュメントとしてだけでなく、今の私たちも同じような状況になっているのではないかと反省しながら読む必要があります。差別に立ち向かうために、そして差別意識に陥らないために、今なお読むに値する古典です。【難易度★★★】

国際センター 森功次



輪島裕介『創られた「日本の心」神話：「演歌」をめぐる

戦後大衆音楽史』 光文社新書、2010年

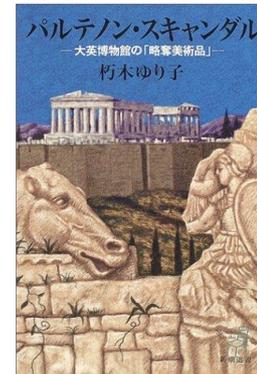
「国に対するイメージ」というものはどの国にもありますが、そうしたイメージは実はさまざまな要因から作り上げられており、ときに史実とはまったく異なる理解をもたらします。この本は、「演歌」と「日本の心」という一見ありがちな結びつきが、いかに創り上げられ、いかに定着していったのか、という過程を追いつつながら、大衆音楽と社会思想との関係を読み解いていきます。人によっては「自分の住んでいる国の、あたりまえだと思っていた文化理解ですら、こんなにも創り上げられたものだったのか」と驚くことになるでしょう。大衆文化の面白さと複雑さを伝えてくれる一冊です。どこかで聞いたことがあるたぐいさんの名曲が出てきますので、YouTubeや音楽サブスクリプションを利用し、耳でも楽しみながら読んでいくといいでしょう。第33回（2011年）サントリー学芸賞・芸術・文学部門受賞作。【難易度★★】

国際センター 森功次



朽木ゆり子『パルテノン・スキャンダル』 新潮社、2004年

大英博物館の中でも、多くの観客を集める目玉展示のひとつがパルテノン・ギャラリーです。ここにはギリシャのパルテノン神殿の彫刻群が飾られています。しかし、なぜギリシャの神殿の彫刻群が大英博物館に飾られているのでしょうか。実はギリシャはこの彫刻群をギリシャに返すよう求め続けているのですが、大英博物館は返還を断り続けています。この返還運動をとりまく対立は、両国の長い歴史と芸術観の変化を背景とする、とてもやっかいな対立なのです。本書はこの彫刻群がイギリスに運ばれるに至った歴史的事情を明らかにするところからはじめ、現代の返還運動を支える政治的動きまで、さまざまな物語を伝えてくれます。この本のテーマはこのパルテノン彫刻ですが、こうした過去の政治的事情に起因する文化品の返還運動は、いまや世界のいたるところで行われるようになってきました。文化と政治の複雑な関係を考えるために、おすすめの一冊です。【難易度★★★】



クリステイ・デイビス、安部剛『エスニックジョーク：自己を嗤い他者を笑う』講談社選書メチエ、2003年

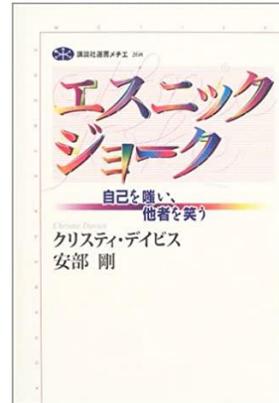
エスニックジョーク (ethnic joke) とは、ある民族の民族性、もしくはある国の国民性を端的にあらわすような話によって笑いを誘うジョークのことです。

エスニックジョークに関する紹介はウェブ上にも散見するし、関連する書籍も複数あります。今回講談社選書のこの一冊を紹介する目的は決して他者を笑うためではありません。分かりやすいジョークを読んで、笑いながら、異文化の存在に、そして各国間の文化相違に気づくことでしょう。よって、この本を異文化理解の入門書として皆さんにお薦めします。そして、世界の目線で自国の文化を見て、自省の念が起こる時、きっと心に響くところがあるのではないのでしょうか。

一方、エスニックジョークは国民性や民族性を大げさに皮肉ったり、民族文化へのをおこなったりと、その性質上民族差別など社会的なタブーに抵触する部分があることを留意してください。

【難易度★★】

国際センター 趙方任



日丸屋秀和『ヘタリア』 幻冬舎コミックス、2008年

昨今人気の擬人化ブームの先駆けとなったと言っても過言ではない本作品は、2006年に最初にwebマンガとして発表された「国擬人化歴史コメディ」漫画です。主人公であるイタリアをはじめ、アメリカやドイツ、日本などおよそ30以上の国と地域が登場人物となって、歴史や地理、果ては各国のホラー映画や軍用レーションの紹介を物語形式でおもしろおかしく紹介！陽気なイタリア、真面目なドイツ、お洒落が好きなフランスなど、各国のお国柄がそれぞれの個性として現れていたり、面白おかしく外国のことを学べる一冊となっています。是非読んでみてください。

【難易度★★★】

国際センター 趙方任



あらた真琴『隣の席は外国人』 ぶんか社、2012年

小学校教師をしていた著者が自身の体験をもとに書いたコミックエッセイ。多くの外国人児童が在籍する公立小学校での、児童、先生、親による異文化交流です。午前の授業が終わったら帰ろうとするブラジル人児童、家庭訪問で出される奇抜な色のお水など、自由で予想外な行動を起こす児童を通してそれぞれのお国柄が垣間見えます。可愛いタッチのイラストでとても読みやすく、日本人教師と外国人達の常識の差が分かりやすく描かれているので、異文化交流を知る最初の一冊にとってもおすすめです。【難易度★】



国際センター 趙方任

【映画】

『海難 1890』(2015年)

日本と親日国といわれるトルコの絆。日本・トルコ友好125周年を記念して制作された映画です。1890年の和歌山県串本町沖におけるトルコ船舶エルトゥールル号海難事故。台風に遭遇した船の乗組員600名のうち、500名以上の死者が出ましたが、現地住民の懸命な救助により69名が奇跡的に助け出されました。そして1985年のトルコ政府主導のトルコ航空によるイランからの日本人救出劇。トルコは、イラン・イラク戦争が激しさを増す中、脱出が間に合わず途方に暮れる日本人駐在員を助け出してくれました。困難な状況の中にあっても、ただ目前の人を救おうと行動を起こした日本人とトルコ人の間の言葉や文化の違いを超えた友情と絆を見ることができます。なぜトルコが日本を慕ってくれるのか、日本側の者として知っておきたい事実です。【涙★★★】

国際センター 伊藤みちる



『最高の花婿』(2014年)

多様な人種や文化、宗教が混在するフランス社会を背景に、異文化同士の共存共栄や寛容というテーマがユーモラスに描かれており、観た後に温かな気持ちになる作品です。フランスの両親と娘4人の家族。上3人の娘が結婚したのは、それぞれイスラム教徒、ユダヤ教徒、中国系の男性でした。敬虔なカトリック教徒の父はさまざまな宗教儀式から食事のルールまで、異文化への驚きと気遣いに疲れ果てて、頭を悩ませていたところ、末娘もとうとう結婚することに！「遂に"フランス人"の婿ができる」と喜んだ両親でしたが、末娘の婚約者と対面し、再び絶望することになりました。4姉妹が選んだ国際色豊かな結婚相手たちが登場。異文化や宗教問題などに直面し、衝突を繰り返しながらも、互いを受け入れようとする一家の姿から学ぶことは多いです。【涙と笑い★★★】

国際センター 伊藤みちる



『ゲット・アウト』(原題: Get Out 2017年)

白人のガールフレンドの実家を訪れたアフリカ系アメリカ人の青年が体験する恐怖を描く映画です。2018年の第90回アカデミー賞で脚本賞を受賞し、作品、監督、脚本、主演男優の主要4部門にノミネートも果たした作品です。黒人と白人の対立と共存をテーマにした映画は今までも多く作られてきましたが、『ゲット・アウト』はホラーとコメディを融合させながら、人種差別の本音と建前を描き出すことで、アメリカ社会に対する鋭い批判を展開しており、とても見応えがあります。人種差別の奥深いところの無知と傲慢、つまり深層意識にある差別を暴き出していて、自分の差別意識について内省する機会になるでしょう。【ドキドキ・心に残る★★★★】

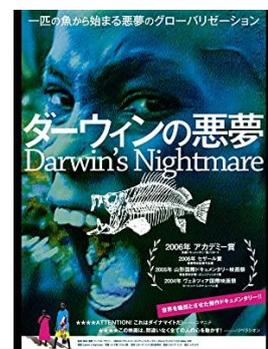
国際センター 伊藤みちる



『ダーウィンの悪夢』(2004年)

東アフリカのビクトリア湖に繁殖する巨大魚ナイルパーチ。この魚は本来この湖には生息していなかった外来種ですが、いまやこの魚は、その加工品をヨーロッパや日本に輸出される巨大産業を生んでいます。しかしこの産業に起因する現地の状況は、貧困、エイズ、売春、ストリートチルドレンなど非常に悲惨なものです。ひとつの魚が思わぬ社会変化を引き起こし、グローバル化が問題を加速させ、無残で救いのない状況が生まれていくその様は、わたしたちと無関係なものではまったくありません。わたしたちの安価な食文化が何によって支えられているのか、このドキュメンタリー作品はその裏側を見直すための良い機会を与えてくれます。

僕は学生時代に友人と三人でこの作品を見たのですが、一人は速攻で寝落ちし、僕ともう一人の友人は衝撃のあまりその後しばらくフィレオフィッシュが食べられなくなりました。【言葉を失う★★★★】



『活きる』(1994年)

中国語原題は『活着』。張芸謀(チャン・イーモウ)監督1994年の作品。中国で誰でも知っている大スター葛優、鞏俐の主演。1994年のBAFTA賞非英語部門最優秀映画賞に選ばれています。また、カンヌ映画祭で審査員特別賞と主演男優賞を受賞しています。

中国建国前の戦乱続きの1940年代から、建国初期の大飢饉の1950年代、そして中国最大の政治運動・文化大革命の1960~1970年代を生きぬける主人公の人生はまさに中国近現代史そのものです。どんなに時代が変わろうとも、またどんなに災難が降りかかってこようと、一生懸命に生きていくところに、人間、社会の価値観や心の寄り処が現れてきます。すこし渋いかもしれませんが、きっと涙をボロボロ流すであろう感動作です。

【思考度★★★★★】

国際センター 趙方任



『唐山大地震』(2010年)

今の中国で人気絶好調の馮小剛監督の2010年の作品。2010年中国映画興収1位を獲得し、涙しない人がいないと言われるほどの力作です。また、日本では2011年3月26日に公開される予定でしたが、2月22日にニュージーランドで発生したカンタベリー地震、そして3月11日に発生した東日本大震災を考慮し、二度も延期された数奇な映画です。

24万人も死んだ1976年中国唐山大地震を題材にした映画です。がれきの下敷きになった二人の子供を見つけた母親が「姉弟どちらか1人しか助けられない」という無慈悲な言葉で究極の選択を迫られました。母親は泣き崩れながら弟を救出することを選びましたが、その後、「死の淵に落とされた」姉のほうも奇跡的に生還しました。その後、母と姉弟はどのような人生を送ったか、



三人は数十年後ついに対面した時、どういう場面になったか、中国の家庭観、生死観、価値観を知るのに最高の感動作です。

推薦者の私自身 1970 年生まれなので、唐山人ではないものの、地震発生当時は 6 歳で、その時の様子を今でもはっきり覚えています。唐山大地震とは皆さんにとっての 3.11 東日本大震災のようなものです。ですが、50 歳になった今でもこの映画を見るたびにやはり涙します。【言葉を失う★★★★】

国際センター 趙方任

【執筆者一覧（五十音順）】

伊藤みちる 国際センター 准教授
趙方任 国際センター 准教授
森功次 国際センター 専任講師